

「小児喘息診療の基本」

東京慈恵会医科大学附属第三病院小児科
勝沼俊雄

以前は「小児喘息は治る」という考え方が主流でしたが、その後、「小児喘息は実は治り難い、だから必要に応じて十分に良くしよう」という考え方に改まりました。言い換えれば、喘息が落ち着いているときにしっかり治療する「長期管理」という考え方であり、ガイドラインの普及とともに浸透してきました。さらに近年は、小児期に喘息があると大人になった時 COPD (慢性閉塞性肺疾患) に罹患しやすい、ということが分かってきました。将来を悲観する必要は全くありませんが、主治医と意識を共有し、禁煙教育や呼吸機能のフォローアップを含め、今できる最善の対応を施すべきと思います。

そのための第一歩は、喘息であるという確かな診断と、適切な重症度の評価です。そして今現在、喘息発作(急性増悪)状態にあるのなら、1日も早くその状態を鎮めることが大切です。その後は前述の長期管理を行います。まずは薬物治療を行うわけですが、室内環境調整(ダニ抗原の低減化、受動喫煙の回避など)も、薬物治療に劣らず重要です。

小児の喘息に対する薬物治療の中心は、ロイコトリエン受容体拮抗薬と吸入ステロイドになります。吸入ステロイドを用いる際にとっても重要なことがあります。それは正しい方法で薬剤を吸入するという事です。当たり前にも思われるかもしれませんが、これが意外と難しく、私たちの調査ではいわゆる重症喘息児の40%が、(治療を強めることなく)吸入手技の確認と指導のみで軽症化しました。

吸入ステロイドをお使いの方は、時々、医師や薬剤師、看護師に確認してもらおうと良いでしょう。

略歴

昭和 60 年	東京慈恵会医科大学卒業
昭和 62 年	国立小児病院アレルギー科レジデント
平成 5 年	学位 (医学博士) 取得
平成 7 年	英国立心肺研究所胸部疾患部門留学
平成 9 年	帰国
平成 13 年	東京慈恵会医科大学小児科学講座復帰 (有給助手)
平成 13 年	同上講師
平成 19 年	同上准教授
平成 22 年	東京慈恵会医科大学附属第三病院小児科 診療部長
平成 29 年	東京慈恵会医科大学小児科 (附属第三病院) 教授